

義天編纂『圓宗文類』卷第一

—解題と翻刻—

吉 津 宜
崎 照 和

一 はじめに

義天が編纂した『圓宗文類』二十二巻のうちの巻第一は、現在龍谷大学図書館に所蔵されている。『圓宗文類』巻第一の発見等の周辺の事情については、大屋徳城の論文「寧樂仏教と高麗朝の仏教」（宗教研究第一年第四輯、昭和十四年十二月二十日発行、一三三頁。後に『仏教史の諸問題』に所収）に「李能和氏の余に語る所に依れば、斯本はもと京城郊外清涼里の開運寺に在つたもので、やがて同氏に帰し、同氏から更に崔南善氏に移つたものである」と述べられている。李能和が本書を一時所蔵していたことは、同氏の著作『朝鮮佛教通史』下編（大正七年刊）四五頁に「圓宗文類。今於此土不可カラ得ルコト見。而日本現存卷第十四。卷第二三之

印本二卷ガリ在三續藏經中ヲ。猶未ヲダサ為シ全部ト也。余久シクシテル得シ圓宗文類第一卷ヲ。寶トシテ而藏ス之ヲ」と述べられている所から知り得る。大屋徳城『高麗續藏雕造攷』（昭和十二年一月十日刊。昭和六十三年四月二十日再版）に『圓宗文類』巻第一の図版が掲載されているが、それには「京城崔南善氏藏」とある。従つて上記大屋著作に掲載の『圓宗文類』巻第一の一部の図版は、崔南善所蔵本によつたものである。この後に本書は龍谷大学図書館に所蔵されることになる。

なお同図書館には、鎌倉期の写本とされる『圓宗文類』巻第十四が所蔵されている。この写本もその奥書によつて、上記大屋著作に掲載されているもの（東林文庫旧蔵）と同一である。

二 『圓宗文類』卷第一について

『圓宗文類』の編纂は義天の指導のもと、多くの知識が参加して行なわれたものである。それに参加した人々の名前が『圓宗文類』卷第一の奥書に示されている。以下それを示すと次の如くである。

| | |
|-----------------|----|
| 秘書省楷書臣 | 鄭先 |
| 興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門 | 道隣 |
| 興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門 | 慧宣 |
| 興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門 | 縉秀 |
| 興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門 | 景宜 |
| 興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門 | 惟儼 |
| 佛日寺寶王院講賢首教觀義學沙門 | 覺之 |
| 真觀寺道樹院講賢首教觀義學沙門 | 承諧 |
| 妙智寺德海院講賢首教觀義學沙門 | 精瑩 |
| 佛日寺龍臺院講賢首教觀義學沙門 | 稟賢 |
| 奉先寺住持伝賢首教觀義學沙門 | 樂真 |
| 松川寺住持伝賢首教觀義學沙門 | 靈悟 |
| 帰信寺住持伝賢首教觀義學沙門 | 應闡 |
| 花巖寺住持伝賢首教觀義學沙門 | 俊韶 |
| 海印寺住持伝賢首教觀義學沙門 | 處元 |
| 興教寺住持伝賢首教觀……首座 | 理琦 |

ところでこの奥書は、最初に道隣（詳校）、慧宣（詳校）、理琦（重校）の名前を出した後、半葉が空白になつており、この後に縉秀以下十七人の僧名を記述する。この中には道隣、慧宣、理琦の名前が重複して出ている。この様な奥書の記述の仕方をどう考えたらよいであろうか。これについては後の検討に待つ。

佛日寺住持伝賢首教觀……首座 處淵
興王寺住持伝賢首教觀兼天台教觀南山律鈔因明等論等觀……弘真祐世僧統 義天

以上は奥書に示された『圓宗文類』の編纂に携わった人々である。このうち義天の門弟は、「大覺國師門徒職名開坐碑陰」によれば、興王寺弘教院の道隣、縉秀、惟儼及び興教寺

理琦、奉先寺樂真、帰信寺應闡、花巖寺俊韶の名前が見い出される。この碑陰には名前が見られぬものの、興王寺弘教院の慧宣は樂真の碑銘である『般若寺元景王師碑』に、義天の入宋に随伴した弟子三名、樂真、慧宣、道隣の中にその名前

が見い出されるから、慧宣は義天の門弟である。従って同院の景宜も義天の弟子と見ることが出来る。故に『圓宗文類』は興王寺弘教院に住していた道隣等の義天の弟子、他寺の住持となつている義天の弟子、更には他寺の諸知識の参加によって、義天の指導のもとに編纂の事業が行なわれたことが知られる。

『圓宗文類』二十二巻は、上記奥書の鄭先の箇所で「鄭先書」と記されていることから鄭先が清書を担当したことが知られる。従つて『圓宗文類』は編纂された段階では筆写本として存在していた。そこで『圓宗文類』が木版本として上梓された時期は何時であろうか。以下これについて考察する。

『圓宗文類』で完本として現存するのは巻第一、巻第十四、巻第二十二の三巻であるが、後者の二巻には巻第一の奥書に見られる様な識語は存在しない。従つて現存する資料からすれば、『圓宗文類』の編纂に参加した人々を示す識語は、同書巻第一の奥書にのみ存在したものと考えられる。

現存する『圓宗文類』巻第一の印行された時期が何時なのか、これを敬避王諱の観点から論じたのが大屋徳城『高麗續藏雕造攷』である。それによると本書には、高麗太祖（在位九一八～九四三）の諱「建」（一〇左5、一二右8）、第十一代文宗（在位一〇四七～八二）の諱「徽」（三三左3）、第三代宣宗の諱「運」（一右2、七左3、二八右3、三三左3、四二左7、四三左5）の最終画が欠筆となつており、これから本書の印行は宣宗朝（一〇八四～九四）或いは次の獻宗朝（一〇九五）の時とする。更に本書には印字について肉細や肥厚が見られるという。以上によつて『圓宗文類』巻第一の印行は、宣宗朝（一〇八四～九四）又は獻宗朝（一〇九五）とし、重修の時期については李朝初期（明の年代の天順の頃

（一四五七～六三））とする。⁽¹⁾ 大屋論文では門弟の覺純が編纂した義天の文集『釋苑詞林』に見られる避諱についても言及しているが、このうち第二代惠宗朝（九四四～九四五）の諱「武」について、本書（四二右8、四三左4）におけるものにまで言及してはいない。更に本書をよく精査してみると、欠筆とされる字の中で、次の「建」（一七左3）や「運」（一右9）は欠筆となつていない。これは重修をする段階で校訂をし直したことを示すものである。また「法」（八左5）、「冀」（三十七右9）は、その字体は鮮明であるが、原字は略字体でその上に字の一画を欠き、そのままでは判読出来ない。

故に『圓宗文類』巻第一の印行は、義天の在世年代（一〇五五～一一〇一）で、獻宗朝以後の時期に行なわれたこと。そして現存する『圓宗文類』巻第一はその重修本であることが知られる。では本書が重修された時期は何時か。大屋論文では上記の如く『圓宗文類』巻第一は李朝初期（天順の頃）の重修本とする。李朝初期における仏典の刊行は、朝鮮国刊經都監において行なわれた。その時期は第七代世祖の天順五年（一四六一）から第九代成宗の成化七年（一四七一）迄の十一年間である。朝鮮国刊經都監からは高麗仏典、すなわち義天の続藏經や続藏經以外の仏典が模刻されている。続藏經以外の仏典で現在確認出来るものは十六部である。⁽²⁾ この中に

解』上中下三巻（巻中のみ現存）がある。これは李朝初期の成化四年（一四六八）開城において複刻されたものである。ところで現存する『圓宗文類』巻第一の奥書には、朝鮮国刊經都監の刊行を示す銘記は無い。このことから『圓宗文類』巻第一は、李朝初期の朝鮮国刊經都監が設置される以前、天順五年（一四六一）以前に重修されたものと考えられよう。

注

- (1) 同著作一二九頁。補遺九九一〇頁。
 (2) 吉津宜英・柴崎照和「廓心『圓宗文類集解』巻中にについて」駒沢大学仏教学部研究紀要第五十二号、五八上下。

次に巻第一の内容について見てみる。本巻は諸部発題類として二十六の經の序文等が収められている。以下それを示すと次の通りである。なお各序の頭に附された記号については、◎は著作の巻頭に附された序文であることを示し、○は著作の巻首の文から抜き出して序文としたことを示す。以上の記号が附されていないものは、その存在形態が分からぬものである。

- 一、進新譯華嚴經表 沙門弘景等上
- 二、新譯大方廣佛華嚴經摺目
- ◎ 三、御製新譯華嚴經序
- 四、晉譯華嚴經探玄記序 沙門法藏述
- 五、續新華嚴略疏刊定記序 沙門慧苑述
- 六、新譯華嚴經疏序 沙門法銑述
- 七、新譯華嚴經清涼疏序 汝州刺史陸長源述
- 八、新譯華嚴經疏序 沙門澄觀述
- 九、隨疏演義鈔序 沙門澄觀述
- 一〇、貞元新譯華嚴經疏序 沙門澄觀奉詔述
- 一一、圓覺經略疏序 中書侍郎平章事裴休撰
- 一二、圓覺經略疏序 圭峯沙門宗密述
- 一三、般若心經略疏序 沙門法藏述
- 一四、金剛般若經纂要序 圭峯沙門宗密述
- 一五、仁王般若經疏序 沙門良賀奉詔述
- 一六、首楞嚴經疏序 御史中丞王隨撰
- 一七、梵網經疏序 沙門法藏述
- 一八、起信論疏序 沙門法藏述
- 一九、起信論疏序 沙門元曉述
- 二〇、御製釋摩訶衍論通玄鈔引文 大遼天佑皇帝製
- 二一、法界無差別論疏序 沙門法藏述
- 二二、十二門論疏序 沙門法藏述
- 二三、華嚴妄盡還源觀序 沙門法藏述
- 二四、注華嚴法界觀門序 縣州刺史裴休述
- 二五、華嚴經隨品讚引文 傳中監修國史魏國公臣姚景禧奉勅撰
- 二六、諸宗止觀引文 兵部侍郎參知政事臣劉詵奉勅撰

右に示した諸部発題類の中で撰者の名前が明記されていないのが、二「新譯大方廣佛華嚴經摠目」と三「御製新譯華嚴經序」とである。前者については、その文の初めに「天冊金輪聖神皇帝親御法筵製序」という言葉がある。以下これを手懸かりとしてその撰者及び撰述年代を考えることにしたい。

則天武后は天授元年（六九〇）九月九日に自ら聖神皇帝と尊称し、如意元年（六九二）五月一日の記がある「織綿迴文記」（『全唐文』卷九七）の末には「大周天冊金輪皇帝」とある。天冊万歳元年（六九五）十月二十六日の記がある明佺撰『大周刊定衆經目録』序には「大周天冊金輪聖神皇帝陛下」と記している。従つて天冊金輪聖神皇帝と尊称したのは、天冊万歳の改元と同時期であるから、「新譯大方廣佛華嚴經摠目」は、天冊万歳元年（六九五）九月九日の改元以後に撰述されたものである。

唐開元十八年（七三〇）撰の智昇『開元釈教錄』卷第九、沙門実叉難陀の項（大正五五・五六六上中）に、
以_テ天后證聖元年乙未_ヲ於_ニ東都大内遍空寺_ニ譯_ニ華嚴經_ヲ天
后親_{シク}臨_ニ法座_ニ煥_シ發序文_ヲ自運_{ランデ}仙_ニ毫首題名品_ヲ
とある。右の文は則天武后が證聖元年（六九五）に、遍空寺において行なわれていた八十巻華嚴經の訳場に臨席して序文を煥発し、その首題名品を仙毫したことを述べる。ここに言われる序文とは、「御製新譯華嚴經序」である。また首題

名品を仙毫しているが、これは『新譯大方廣佛華嚴經摠目』中の「天冊金輪聖神皇帝親御法筵製序」以下の文を指す。故に「新譯大方廣佛華嚴經摠目」とは、則天武后が仙毫した首題名品を指す。

「御製新譯華嚴經序」については、海印寺に現存する高麗大藏經は再雕本であるが、その中の八十巻華嚴經の卷頭に天冊金輪聖神皇帝製「大周新譯大方廣佛華嚴經序」が附されている。雕造年代は卷末にある「乙巳歳高麗國大藏都監奉勅雕造」の刊記によつて、高宗三十二年（一二四五）である。初雕大藏經は高宗十九年（一二三二）蒙古の侵入によつて焚失し、同二十三年（一二三六）江華島に大藏都を監設置して再雕を開始している。義天が見た八十巻華嚴經は初雕大藏經であり、この巻頭には則天武后的経序も含まれていた。当然その経序の撰者が則天武后であったことを知っていたはずである。如何なる理由によつて義天は撰者名を除いて「御製新譯華嚴經序」の題名のみを挙げたのであらうか。また右に示したと同じ題名をもつては『全唐文』卷九八、高宗武皇后の項にも収録されている。従つて「御製新譯華嚴經序」は、則天武后が撰述した「大周新譯大方廣佛華嚴經序」であつた。

以上により「新譯大方廣佛華嚴經摠目」と「御製新譯華嚴經序」とは則天武后的撰述であることが知られた。

『宋高僧伝』卷第五、唐荊洲玉泉寺恒景伝によれば⁽¹⁾、その生没年代は貞觀八年（六三四）七一二）九月二十五日である。

実又難陀は八十巻華厳經を證聖元年（六九五）三月十四日大遍空寺にて翻訳を開始し、聖曆二年（六九九）十月八日仏授記寺にて訳し終えている。慧苑『刊定記』卷第一に訳經に参加した者について、義淨、弘景、円測、神英、宝法（＝法寶）、華嚴和上（法藏）等が訳し、復礼は綴文と記す。『刊定記』卷第一では弘景が如何なる訳位に携わったか示してはいないが、『開元釈教録』卷第九の記述により弘景は法寶等と証義を勤めている。また永昌元年（六八九）から天授二年（六九一）での提雲般若の訳場でも同じく証義を勤めている。

聖曆二年（六九九）仏授記寺において、法藏は詔をうけて八十巻華嚴經を講じ、その中の華藏世界品に至つて講堂や寺内の地面が震動するという出来事があり、弘景はこの神異を上奏した。⁽⁶⁾

法藏の講經による神異を最初に記したのが慧苑『刊定記』卷第一、第八部類伝訳、三伝通感應においてである。⁽⁷⁾それにすると八十巻華嚴經の翻訳が畢えた後に、法藏は諸大徳から講經の乞請があり、同年十月五日に開講し、十二月十二日の晩に至り華藏世界海を講じた際に、上記の神異があった。この神異を実又難陀、明詮（住）、德感等が実際に見ている。聖

暦三年（七〇〇）臘月（十二月）十九日に都維那の慧表が上首となつて上奏している。この講經による神異は崔致遠『唐大薦福寺故寺主翻經大徳法藏和尚伝』（以下『法藏和尚伝』と略称）にも述べられている。神異があつたのは臘月望前三日（＝十二月十二日）の晩とし、当寺（＝仏授記寺）龍象が上奏したとする。これに対する則天武后的返書は、語句の一部が相違するのを除けば、『刊定記』卷第一に記載される文と同一である。以上の『刊定記』及び『法藏和尚伝』の記述から見ると『宋高僧伝』の記述との相違は大きい。

(1)、『刊定記』『法藏和尚伝』では、講經を諸大徳の乞請によるものとするに対し、『宋高僧伝』は詔によるものとしている。

(2)、講經による神異の日時を、『刊定記』『法藏和尚伝』では十二月十二日の晩での華藏世界海の講經に起因すると言うのに対し、『宋高僧伝』では十月八日の華藏世界品の講經に因るという。これは『宋高僧伝』が八十巻華嚴經の訳經の功が畢わつた日と、法藏の講經による神異のあつた日とを混同したものである。

(3)、法藏の講經による神異を上奏した者について、『刊定記』では都維那慧表、『法藏和尚伝』では当寺（仏授記寺）の龍象とする。これに対して『宋高僧伝』では、都維那僧弘景とする。

以上から『宋高僧伝』に記載された法藏の講經による神異は、唐末の混乱による資料の散佚と、これによる不確かな伝聞に基づいたものである。

前記の上奏に対する勅（則天武后か）がある。その文は『刊定記』『法藏和尚伝』『宋高僧伝』に見られる。しかし三者の間には語句において異同が見られる。後の二者は『刊定記』の記述によつたものと考えられるが、依據した写本が異なるつていたのであらう。

「進新譯華厳經表」は、その中に「伏シテ惟ミルニ天冊金輪聖神皇帝陛下云々」とあるから、その上奏の時期は、則天武后的名称からして如意元年（六九二）五月一日以降である。

注

(1) 明佺『大周刊定衆經目録』卷第十五末、訳場列位に「翻經大德荊州玉泉寺弘景」（大正五五・四七五下）とあるから、弘景が本来の名前である。

(2) 『開元釈教錄』卷第九（大正五五・五六五下）

(3) 『開元釈教錄』卷第九（大正五五・五六六上）

(4) 『開元釈教錄』卷第九（大正五五・五六六上）同五六五中

(5) 『宋高僧伝』卷第五、法藏伝（大正五〇・七三二中）

(6) 『宋高僧伝』卷第五、法藏伝（大正五〇・七三二中）

(7) 続藏一一五一・二五右下ノ左上

(8) 聖曆三年は五月に久視元年と改元しているから、聖曆二年の誤りである。これは書写の際の誤写によるものであらう。

(9) 大正五〇・二八一下

五、慧苑「續新華嚴略疏刊定記序」

この序は『續新華嚴略疏刊定記』卷首の文「觀夫大像ノ世主妙嚴品第一」を以て序としたものである。

慧苑の生没年代は定かではない。坂本幸男氏はその著作において、慧苑の生没年代を咸亨四年（六七三）～天寶二年（六七三）頃とする。⁽¹⁾ 慧苑の伝記に関する資料は少ない。その中でも『宋高僧伝』卷第六の記述は纏まっている方であるが、そこからは多くのことは知り得ない。ただ『開元釈教錄』卷第九の新訳華厳經音義の項や、崔致遠『法藏和尚伝』⁽³⁾によつて、慧苑が法藏の上足の門人であることが知られるのみである。

『刊定記』が撰述される事情については、『刊定記』卷首に

述べられている。それによると本書は、法藏の未完成の遺稿である新訳華厳經の注釈を受け継いで完成させたものである。その撰述年代は、『華嚴經音義』に言及していることから、それ以後であろうとされている。

清代仁宗の嘉慶十九年（一八一四）薰誥等撰『全唐文』卷九一四に「新譯大方廣佛華嚴經音義序」が収められている。

注

(1) 『華嚴教學の研究』第一部慧苑の華嚴教學の研究、第一章 静法寺慧苑の伝記、六頁。

(2) 大正五五・五七一上

(3) 大正五〇・二八五上

六、法銑「新譯華嚴經疏序」

『宋高僧伝』卷第五、法銑伝によれば、その生没年代は開元六年（大曆十三年（七一八）～七七八）十一月七日である。彼の伝記としては、他に清昼撰「唐杭州靈隱山天竺寺大德詵法師塔名並序」（『全唐文』九一六）がある。

法銑伝によれば、故地恩貞大師（慧苑か）に就いて華嚴を学んでいる。法銑は天寶六年（七四七）蘇州常樂寺にて盧舎那仏の像を描いて大衆を教化し、次いで大曆二年（七六七）常州龍興寺にて華嚴經を講じていて、それは十遍にも及んだという。そして「義記十二卷」を撰した。法銑の著作について、『義天錄』卷第一に「華嚴經疏三十一卷 法銑述」「刊定記纂釈二十一卷、或一三卷 法銑創造、正覺再修⁽¹⁾」とある。「義記十二卷」について、『義天錄』には「刊定記纂釈」に二十一卷本と十三卷本との二本のあることを言う。卷数からすれば「義記十二卷」は、「刊定記纂釈」十三卷本に相当か。

『新譯華嚴經疏』三十一卷は『義天錄』にのみ採録されている。「新譯華嚴經疏序」はこの序文である。『新譯華嚴經疏』はその一部である第一上（『圓宗文類』第四所収）が順高『起信論本疏聽集記』卷第三本に引かれている。

『義天錄』に採録されていない法銑の著作に『梵網經疏』がある。永超『東城伝灯目録』や凝然『華嚴宗經論章疏目録』

では二巻とし、靈典『高山寺聖教目録』卷上では四巻とする。⁽³⁾『梵網經疏』で現存するものは、卷上之上（日華仏教研究会年報第一所収）、卷上之下（続藏一一六〇一三）である。前者は宗性転写本で、島田蕃根旧蔵本である。

注

(1) 大正五五・一一六六上

(2) 仏全九二・一二五上下

(3) 「梵網經疏四卷 法銑」（昭和法寶目録第三卷、九一三上）

七、陸長源「新譯華嚴經清涼疏序」

陸長源（？～七九九）の事績は舊唐書一四五卷、列伝第九五等に出ていて、そこには彼の生没年代を知る手懸かりはない。しかし同じ卷の劉全諒及び董晉傳によると、董晉は貞元十五年（七九九）二月に没したが、彼の没後十日もたたないうちに兵乱が起こり、この乱中に陸長源は殺された。これから陸長源は貞元十五年（七九九）二月頃に没したことなどが知られる。陸長源は貞元十二年（七九六）に檢校禮部尚書を授かっており、汝州刺史はこれ以前の官職である。澄觀は五台山に入山して、貞元三年（七八七）に『華嚴經疏』二十巻を撰述している。従つて陸長源の「新譯華嚴經清涼疏序」は貞元三年から同十二年迄の間に撰述されたものである。

金沢文庫には鎌倉時代の古写本『華嚴經疏』二十巻本が所蔵されており、その巻頭に陸長源「大方廣仏華嚴經疏序」と

澄觀の自序が附されていると言⁽¹⁾う。しかし後者は陸長源序の様に序文として単独に存在するもので無いことは、後に述べるが如くである。『圓宗文類』卷第一においては、前者は「新譯華嚴經清涼疏序」として、後者は「新譯華嚴經疏序」として収められている。故に陸長源序の本来の呼称は、「華嚴經疏」卷頭に附されている如く「大方廣佛華嚴經疏序」である。また喜海撰『華嚴祖師傳』卷下に陸長源「華嚴大疏序」が引用されている。しかしこれは『圓宗文類』卷第一からの引用ではなく、二十卷本華嚴經疏の卷頭に附されている序を用いたものである。その理由として、同じ卷下に大唐文宗皇帝御製「清涼國師大和上澄觀真讚」を引いて、これは『圓宗文類』から引用したとする注記を示している。これに対しても陸長源「華嚴大疏序」については、その注記が無い。

八』)が下された。

代宗はまた不空訳『仁王護國般若波羅蜜多經』について

「新翻護國仁王般若經序」(『全唐文』卷四九)を著している。

注
(1) 高橋秀栄「陸長源が撰述した「大方廣佛華嚴經疏序」について」金沢文庫研究二三五号、一五〇~一七頁。

(2) 『高山寺聖教目録』卷上に「華嚴大疏二十卷 澄觀造」(昭和法寶目錄第三卷、九一一中)とある。

一五、良賀「仁王般若經疏序」

この序は『仁王護國般若波羅蜜多經疏』卷首の文「粵真理湛寂」序品第一」を以て序としたものである。

『宋高僧伝』卷第五、良賀伝によると、その生没年代は開元

出でている。それによると王隨は、北宋初期の仁宗の代（一〇二二～六二）に活躍した人である。進士甲科に合格し、途中紅余曲折はあつたものの、明道年間（一〇三二～三三）に江淮安撫使となり、後に宰相となっている。王隨は本性から仏教を好み、また裴休を慕つたとされる。

『首楞嚴經疏序』は子璿（？～一〇三八）『首楞嚴義疏注經』二十卷に対する序文である。本序文の成立は、序文の中に「大宋天聖八年青龍庚午孟冬二十一日辛丑道齋東軒序」とあるから、天聖八年（一〇三〇）十月二十一日に撰述されたことが分かる。

『宋藏遺珍』上集、第四函には、王隨等撰『傳燈玉英集』十五卷（卷一、四、七、九、一一、一三欠）が収録されている。

一九、元曉「起信論疏序」

元曉の生存年代は義寧元年～垂拱元年（六一七～六八六）である。

この序は『起信論疏』巻首の文「然夫大乘之…消息之耳」を以て序としたものである。ただし『圓宗文類』卷第一の「起信論疏序」では、然を原に言い換えている。

二〇、大遼天佑皇帝（道宗）「御製釋摩訶衍論通玄鈔引文」

遼代の仏教はその中期以後の聖宗、興宗、道宗の時代にその隆盛期をむかえた。特に研究されたのが慈恩宗と華嚴宗であり、その中でも華嚴宗は遼代の仏教を代表する。近年相

次いで発見されている遼代仏教の関係資料の中に、多くの華嚴関係の仏典が含まれていることが上記の点を実証するものである。

興宗（在位一〇三一～五五）の時代に『契丹藏』の雕造が行なわれ、興宗の後を踵いだ道宗（在位一〇五五～一一〇一）も厚く仏教を保護し、かつ仏典の雕造をも行なつている。雕造された仏典の数がどの位あつたのかは不明である。しかし近來、中国河北省豊潤県天宮寺仏塔から発見された十部の仏典の中に、道宗の勅命によつて雕造された『大乗本生心地觀經』『大乘妙法蓮花經』が含まれていた。⁽²⁾

注

(1) 鎌田茂雄『中國華嚴思想史の研究』第七章、第三節遼代密教と澄觀の華嚴。

(2) 笠沙雅章「遼代華嚴宗の一考察——主に新出華嚴宗典籍の文献学的研究——」大谷大学研究年報第四十九集、平成九年三月刊、一一～一四頁。

この外に道宗の勅命によつて雕造された仏典としては、散佚したと考えられていた守臻『釈摩訶衍論通贊疏』巻十（十巻のうち）、『同通贊科』巻下（上中下三巻のうち）が応県塔木塔より発見されている。

道宗は崇仏の天子として知られているが、また密教や華厳にも造詣が深く、咸雍四年（一〇六八）二月に御製『華嚴經贊』を頌行し、同八年（一〇七二）七月には御書『華嚴經五

頌』を群臣に示している。⁽¹⁾

注

(1)『遼史』本紀第二十二、第二十三。

義天『新編諸宗教藏總錄』卷第一には、道宗の著作として「發菩提心戒本二卷」「隨品讚一卷」が採録されている(大正五五・一一六七下)。上記の御製『華嚴經贊』は「華嚴經隨品讚」一卷に当たる。この「華嚴經隨品讚」一卷は義天編纂の『圓宗文類』卷第二十二に収められている。義天と道宗との関係については、道宗が義天に鮮演の著作『華嚴經談玄決』⁽¹⁾を贈つており(『大遼御史中丞耶思齋書三首』)、義天は道宗に元曉の著作を贈つている(『上大遼皇帝曉公章疏表』⁽²⁾)。この様な親密な関係もあって、道宗の著作が『圓宗文類』に採録されたものであろう。

注

(1)『大覺國師外集』第八卷、韓國佛教全書第四卷、五八二中。
(2)『大覺國師文集』第八卷、同五四一上。

二五、姚景禧「華嚴經隨品讚引文」

姚景禧の事績は、遼史卷九六、列伝第二六に出ている。それによると重熙五年(1036)に進士乙科に合格し、将作監となる。この後翰林学士、樞密副使、参知政事を歴任する。道宗が即位の時、乞われて顧問となり、北府宰相を務め

る。以上の記述によれば姚景禧は、道宗代に活躍した人物である。

「華嚴經隨品讚引文」は、道宗御製の『華嚴經隨品讚』一巻(『圓宗文類』卷第二十二所収)に対する序文である。

二六、劉詵「諸宗止觀引文」

これは道弼『諸宗止觀』(正式名『大乘諸宗修行止觀要訣』)⁽¹⁾三巻に対する序文である。「引文」という言葉をもつ序文は、この他に前記道宗の「御製釋摩訶衍論通玄鈔引文」や姚景禧「華嚴經隨品讚引文」、また耶律孝傑「釋摩訶衍論贊玄疏引文」(続蔵一一七二一十五)趙孝嚴「大毘盧遮那成佛神変加持經義釋演密鈔引文」(同一一三七一)が知られる。このことから「引文」という言葉を序文の題名の中に入れるることは、道宗代の仏教の一つの特色であると言えよう。

『大乘諸宗修行止觀要訣』の撰者である道弼は、興中府和龍山花嚴寺の僧で、道宗から通円大師の号を賜わっている。⁽¹⁾

『義天錄』には道弼の著作として、卷三に「諸宗止觀三巻」「同科一巻」(以上大正五五・一一七八上)、卷一には澄觀『演義鈔』に関する著作「演義集玄記六巻」「演義逐難料一巻」(以上同一一六六上)があげられている。観復『華嚴演義鈔会解記』十巻には、「演義集玄記」が十五ヶ所にわたって引用されている。

はない。しかし「諸宗止觀引文」の中に道弼の言葉を引用しているから、道弼と同時代か、あるいはそれ以後の人物であろう。

注

(1) 竹沙論文四三貢。覚苑『大日經義釋演密鈔』卷第一には「副留守守衛尉卿隨西牛鉢守司空悟玄通圓大師弼公」（續藏「一一三七一・一左下」とある。

法藏（貞觀十七年～先天元年（六四三～七一二）十一月十四日）については、四「晉譯華嚴經探玄記序」、一三「般若心經略疏序」、一七「梵網經疏序」、一八「起信論疏序」、二一「法界無差別論疏序」、二二「十二門論疏序」、二三「華嚴妄盡還源觀序」の七つの序をあげている。

この中、「般若心經略疏序」を除いては序としては単独に存在せず、本文卷首の文を抜き出して序としたものである。すなわち「晉譯華嚴經探玄記序」は『探玄記』卷首の文「夫以法性・世間淨眼品第一」を以て序となし、「梵網經疏序」は『梵網經菩薩戒本疏』卷首の文「原夫法身虛應・四十八輕戒一卷」を以て序となし、「起信論疏序」は『大乘起信論義記』卷首の文「夫真心寥廓・悟入者矣」を以て序となし、「法界無差別論疏序」は『大乘法界無差別論疏』卷首の文「詳夫性海・下當別辨」を以て序となし、「十二門論疏序」は『二門論宗致義記』卷首の文「夫以玄綱絕待・義下當別釋」を

以て序となし、「華嚴妄盡還源觀序」は『修華嚴奧旨妄盡還源觀』卷首の文「夫滿教難思・俯而詳焉」を以て序としたものである。

澄觀（開元二十六年～開成四年（七三八～八三九）三月六日）については、八「新譯華嚴經疏序」、九「隨疏演義鈔序」、一〇「貞元新譯華嚴經疏序」の三つの序をあげている。

「新譯華嚴經疏序」について、金沢文庫所蔵の二十巻本華嚴經疏には、大正藏經が底本とした明本の様に、その書名が「大方廣佛華嚴經疏卷第一并序」ではなく、その書名には「并序」が脱落している。このことは二十巻本華嚴經疏には、澄觀の序は単独に存在しないことを意味する。故に本序は『華嚴經疏』卷首の文「往復無際・世主妙嚴品第一」を以て序としたものである。澄觀は大曆十一年（七七六）五台山に入山し、大華嚴寺善住閣院において講義を行ない、これらを基として貞元三年（七八七）に『華嚴經疏』が成立する。『華嚴經疏』の復註である『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』は、貞元三年以後の成立である。

「隨疏演義鈔序」は『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』に対する自序である。義天は續藏經を雕造しているが、その中に『隨疏演義鈔』四十巻もあった。本序はこの『隨疏演義鈔』卷頭に附されているものである。

「貞元新譯華嚴經疏序」は、『貞元新譯華嚴經疏』卷首の文

「大哉眞界・思過半矣」を以て序としたものである。正字続

蔵に所収の『貞元新譯華嚴經疏』の各巻の末尾に「壽昌元年

乙亥歲高麗國大興王寺奉宣雕造」の刊記がある。壽昌元年

(一〇九五)は遼の年号で、道宗の治世である。この歲は高

麗獻宗元年に当たる。義天は宋から帰国の後、興王寺の住持

となり、同寺に教藏都監を設置して続蔵經を刊行している。

仏典の刊行年代は宣宗七年(一〇九〇)から義天没後の肅宗六年(一一〇一)の間とされる。前掲の『貞元新譯華嚴經疏』は、その刊記から義天が刊行した続蔵經の一部である。

宗密(建中元年～會昌元年(七八〇～八四〇)一月六日)

については、一二「圓覺經略疏序」、一四「金剛般若經纂要序」の二つの序をあげている。

「圓覺經略疏序」は『圓覺經略疏註』四巻に対する序である。宗密は長慶二～三年(八二二～三)にかけて精力的に圓覺經について五部の注釈書を著わしている。『圓覺經略疏註』もこの頃に撰述されたものである。

「金剛般若經纂要序」は『金剛般若經纂要』一巻についての序である。本著作は天和十四年(八一九)以後の成立と考えられている。⁽²⁾

注

(1) 『義天錄』卷第一には『金剛般若經纂要』に宗密述の一巻

本と、宗密述、子璿治定の二巻本との二本をあげている

(大正五五・一一七〇下)
(2) 鎌田茂雄『宗密教学の思想史的研究』第二章宗密の伝記と著作、六七～六八頁。

裴休については、一一「圓覺經略疏序」、二四「注華嚴法界觀門序」との二つの序をあげている。裴休(貞元七年～咸通五年(七九一～八六四))の事績については、舊唐書一七七、新唐書一八二に述べられている。裴休は宣宗の代(八四六～八五九)に宰相まで務めた仏教の篤信者である。初めは宗密に師事し、宗密の没後は黃檗希運に師事した。

「注華嚴法界觀門序」の撰述年代については、署名された官職(縣州刺史)から考えることにしたい。裴休撰『普勸僧俗發菩提心文』一巻の巻末に「開成三年六月二十日縣州刺史裴休記」(続蔵二一八一四・三五三左上)とある。従って「注華嚴法界觀門序」は、開成三年(八三八)頃に撰述されたものであろう。宗密は裴休の『普勸僧俗發菩提心文』に対して「勸發菩提心文序」(同三五〇右上下)を著わしている。

「圓覺經略疏序」の成立年代について、本序に署名されている官職(中書侍郎平章事)から見ると、裴休は宣宗の大中六年(八五二)同中書門下平章事(=中書門下侍郎平章事)に進んでいる。これにより「圓覺經略疏序」は、大中六年以後の撰述である。

裴休には、以上あげた二つの序の外に、宗密の著作に対し

て「華嚴原人論序」「釋宗密禪源諸詮序」（以上『全唐文』卷七四三）を著わしている。裴休が師事した宗密は會昌元年（八四一）一月六日、草堂寺興福塔院にて示寂している。

裴休は宗密没後十四年の大中九年（九五五）十月十三日に、宗密の碑文「唐故圭峰定慧禪師傳法碑」（『金石萃編』卷一一四、『全唐文』七四三）を撰述している。

三 『圓宗文類』の現存する佚文による内容の復元

『圓宗文類』は現在卷第一、卷第十四、卷第二十二が完本として存在し、他の卷数に収められた諸文は断片として存在する。諸書に断片的に引用されている佚文及び識語に基づいて『圓宗文類』の内容を復元するならば、次の様になる。

卷数 内 容
引用文献

◎第一卷 諸部発題類 *八十經御製序〔御製新譯華

嚴經序〕（『聽集記』第一本）

*長源「華嚴大疏序」（『祖師

伝』卷下）

*宗密「圓覺疏序」（『祖師伝』

卷下）

第二卷 「本宗五教類上」

○第三卷 ★延俊『起信論演奧抄』第二
（『教理鈔』第四）

元朗『（起信論疏）集釈記』
（『演義鈔纂釈』三上之一）

元朗『（起信論疏）集釈記』
（『聽集記』卷第三本、☆）

元朗『（起信論疏）集釈記』
（『教理鈔』第三）（『演義鈔

纂釈』三上之一）（『聽集記』

第三本）

元朗『（起信論疏）集釈記』
（『演義鈔纂釈』三上之一）

○第四卷

「？」

三上（『聽集記』卷第三末）

元朗『起信論疏集釈記』卷

上之下（『教理鈔』第三、

☆）

元朗『起信論疏集釈記』

（『聽集記』卷第二末、☆）

（『演義鈔纂釈』三上之一）

元朗『（起信論疏）集釈記』

（『聽集記』卷第三本、☆）

元朗『（起信論疏）集釈記』

（『教理鈔』第三）（『演義鈔

纂釈』三上之一）（『聽集記』

延俊『起信論演奧抄』第二
（『聽集記』卷第三末）

智正『華嚴經疏』第一上
（『聽集記』卷第三本）

智儼『無性釈攝論疏』第一
（『聽集記』卷第三本）

法銑『新華嚴經疏』第一

(『聽集記』卷第三本)

◎第十四卷

諸文行位類上

第十五卷

[諸文行位類下]

慧苑『華嚴經刊定記』一上

(『聽集記』卷第三本)

第十六卷

第十五卷

第十七卷

第十八卷

法藏『十二門論疏』(『聽集

記』卷第三本)

第十九卷

神秀『唐華嚴經疏』第一上

(『聽集記』卷第三末)

第二十卷

「？」

文超『華嚴自防遺忘集』第

三・行小果三生究竟門(『深

意鈔』卷第三)

○第七卷

諸文宗趣類

★延俊『起信論演奧鈔』第二

(『教理鈔』第五末)

延俊『起信論演奧鈔』第二

(『聽集記』卷第三末)

延俊『起信論演奧鈔』第二

(『聽集記』卷第五末、☆)

文超『華嚴自防遺忘集』第

四・初心行円成正覺門(『問

答抄』上之上)(『手鏡』

(『五教章纂釋』第三)

伝奥『錦冠抄』第二上(『問

答抄』下之四)

○第二十一卷 諸文別章類

★義湘『華嚴一乘法界図』
(湛睿写、金沢文庫蔵)

第十三卷

第十二卷

第十一卷

第九卷

第十卷

第八卷

戒珠『別伝心法儀』（湛睿
写、金沢文庫蔵）

戒珠（？）『誠惡勸善并勉
学』（湛睿写、金沢文庫蔵）

法藏『花嚴經普賢觀行法
門』（『教理鈔』第五）

智儼『華嚴六相頌』（『復古
記』卷六）（『見聞鈔』卷第
六）

文超『花嚴自防遺忘集』卷
十（同書卷末識語、金沢文
庫蔵）

※淨源法師教義分齊章重校序
（『五教章纂釈』第一）
※義分齊重校序・淨源（『問
答抄』上之上）

※儼和尚報恩願文（『祖師伝』
卷上）

※華嚴宗主賢首國師真讚（『祖
師伝』卷下）

※清涼國師大和上澄觀真讚
（『祖師伝』卷下）

○第二十二卷 讀頌雜文類
（凡例）

※義相大師ノ御モトヘノ御消
息（『賢首國師寄海東書』
（『聞書』上）

※賢首國師寄海東書（『五教
章纂釈』第一）

※宗家送新羅義相大師消息
（『賢首國師寄海東書』（『問
の文
答抄』上之上）

※淨源（『教義分齊重校序』
（『聞書』上）

略 称

『祖師伝』・喜海『華嚴宗祖師伝』
『聽集記』・順高『起信論本疏聽集記』

○該当卷数の本文の全てが現存していることを示す
○該当卷数の本文の一部が現存していることを示す
★卷の章名が記されている著作や写本であることを示す
☆同じ卷で同書の引用が他所にあるもの

*日本撰述の著作に引用されている『圓宗文類』卷第一の文
※日本撰述の著作に引用されている『圓宗文類』卷第二十二

『聞書』.. 明惠口述『五教章上卷聞書』

『深意鈔』.. 聖詮『華嚴五教章深意鈔』

『手鏡』.. 盛譽『華嚴(初心)手鏡』

『教理鈔』.. 湛睿『起信論義記教理鈔』

『演義鈔纂积』.. 湛睿『華嚴演義鈔纂积』

『五教章纂积』.. 湛睿『五教章纂积』

『見聞集』.. 湛睿『華嚴經旨歸見聞集』

『問答抄』.. 審乘『華嚴五教章問答抄』

『見聞鈔』.. 靈波『五教章見聞鈔』

『聴抄』.. 聖憲『五教章聴抄』

『復古記』.. 善熹『華嚴一乘義分齊章復古記』

右に示した『圓宗文類』の内容項目等は、諸書に書き留められている記事によつて作成したものである。ところで『圓宗文類』卷第十四、諸文行位類上では、引用文の末尾に割註の形で、次の様な注記が見られる。

『引用文献』

『割註』

- 教義分齊章卷中 → [見三生類] (続藏二一八一五・三九
五右上)
- 〔見三生類〕 (続藏二一八一五・三九
五右下)
- 探玄記第一、宗趣 → [見宗趣類] (続藏二一八一五・三九
五右下)
- 探玄記第十六 → [見斷障類] (続藏二一八一五・四〇
六左上)
- 探玄記第四、第二會 → [見佛土類] (続藏二一八一五・三九
六左上)
- 〔見佛土類〕 (右同)
- 〔見佛土類〕 (続藏二一八一五・三九
六左下)
- 〔見佛土類〕 (続藏二一八一五・三九
七左上)
- 〔見發心類〕 (続藏二一八一五・三九
八左上)
- 〔見三生類〕 (続藏二一八一五・三九
九左下) → [第二十卷] 諸文三生類
(?)
- 探玄記第五、第三會 → [次下梵行發心二品見發心類] (続藏
二一八一五・四〇一右上)
- 探玄記第七 → [三心之義見發心類] (続藏二一八一
五・四〇三右上)
- 探玄記第九、第六會 → [見十地宗要類] (続藏二一八一五
四〇四左下)
- 探玄記第十五 → [見佛身類] (続藏二一八一五・四〇
六右下)
- 探玄記第十六 → [見斷障類] (続藏二一八一五・四〇
六右下)

八右下)

右に示した「三生類」「宗趣類」「佛土類」「發心類」「十地宗要類」「佛身類」「斷障類」について、これらは一体何を示しているのであらうか。結論を先に言えば、これらは『圓宗文類』の章名を指していると考えられる。例えば「宗趣類」

は、第七巻諸文宗趣類に相当すると言える。「三生類」については、現存する資料によつて『圓宗文類』第二十巻に収録されていることが明らかな文献の中に文超『華嚴自防遺忘集』第三、行小果三生究竟門という三生に関する文献が引かれている。これによると第二十巻は、三生等に関する文献を集めたものと言える。この故に「三生類」は第二十巻に相当すると言えよう。

また『圓宗文類』の章名は、第一巻の諸部発題類の様に五文字によつて表記されている。このことから上記の『圓宗文類』の各章についてみれば、「宗趣類」は第七巻の「諸文宗趣類」のことであり、以下これに準じて言えば、「諸文三生類」「諸文佛身類」「諸文佛土類」「諸文發心類」「諸文斷障類」及び「十地宗要類」となる。

の外に、該当する巻数は不明であるが、「諸文三生類」「諸文佛身類」「諸文佛土類」「諸文發心類」「諸文斷障類」「十地宗要類」をその内容としていることが知られる。

四 書誌学的考察

本書は李朝初期に重修された木版本である。

帙入りで、帙の表の左題簽に「圓宗文類卷第一」とある。表紙の左方に墨筆で「圓宗文類第一」、表紙裏の中央には墨筆で「三十九／円宗文類卷第一／高麗版一冊」とある。また覆表紙の中央には墨筆で「圓宗文類卷二／高麗版」とある。

書物の体裁は、袋綴であり、界線がある。

法量はタテ三一・三ナミ、ヨコ二〇・六ナミである。

紙数は本文四十六枚、表紙、覆表紙、裏表紙と共に計四十九枚である。

半葉毎に字数は二十字（六左一行目のみ二十二字）、行数は九字である。

凡例

以上によつて『圓宗文類』は、内容項目が明らかな第一巻諸部発題類、第二巻本宗五教類上、第三巻本宗五教類下、第七巻諸文宗趣類、第十四巻諸文行位類上、第十五巻諸文行位類下、第二十一巻諸文別章類、第二十二巻讚頌雜文類の八巻

そのままにした。

一、翻字に当つては、出来るだけ原文どおりにしたが、印刷の都合上左記の字を次の如く改めた。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|------|---|---|---|---|---|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 隘 | 隘 | 遏 | 遏 | 矣 | 矣 | 維 | 維 | 隸 | 隸 | 鑒 | 鑒 | 溢 | 溢 | 淨 | 淨 | 處 | 處 | 昇 | 昇 | 將 | 將 | 捷 | 捷 | 紹 | 紹 | 嘗 | 嘗 | | | | | | |
| 陰 | 陰 | 韻 | 韻 | 紛 | 紛 | 蘊 | 蘊 | 會 | 會 | 慧 | 慧 | 繪 | 繪 | 宸 | 宸 | 靜 | 靜 | 讓 | 讓 | 植 | 植 | 寔 | 寔 | 觸 | 觸 | 曠 | 曠 | | | | | | |
| 映 | 映 | 盈 | 盈 | 益 | 益 | 悅 | 悅 | 閱 | 閱 | 粵 | 粵 | 苑 | 苑 | 尋 | 尋 | 真 | 真 | 震 | 震 | 瞋 | 瞋 | 曆 | 曆 | 仍 | 仍 | 邃 | 邃 | | | | | | |
| 爰 | 爰 | 園 | 園 | 猿 | 猿 | 遠 | 遠 | 緣 | 緣 | 轍 | 轍 | 過 | 過 | 曾 | 曾 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 纖 | 纖 | 善 | 善 | 絕 | 絕 | 繙 | 繙 | | | | | | |
| 跨 | 跨 | 海 | 海 | 角 | 角 | 隔 | 隔 | 廊 | 廊 | 獲 | 獲 | 過 | 過 | 損 | 損 | 陀 | 陀 | 駄 | 駄 | 數 | 數 | 髓 | 髓 | 卅 | 卅 | 菁 | 菁 | 雪 | 雪 | | | | |
| 壓 | 壓 | 壓 | 壓 | 曷 | 曷 | 罕 | 罕 | 卷 | 卷 | 勘 | 勘 | 欵 | 欵 | 勑 | 勑 | 朕 | 朕 | 闡 | 闡 | 說 | 說 | 竊 | 竊 | 妙 | 妙 | 續 | 續 | 曇 | 曇 | | | | |
| 還 | 還 | 煥 | 煥 | 緘 | 緘 | 寰 | 寰 | 關 | 關 | 苜 | 苜 | 含 | 含 | 致 | 致 | 置 | 置 | 顛 | 顛 | 曾 | 曾 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 綜 | 綜 | 數 | 數 | | | | |
| 奇 | 奇 | 歧 | 歧 | 紀 | 紀 | 鬼 | 鬼 | 記 | 記 | 羨(羨) | 羨(羨) | 含 | 含 | 捐 | 捐 | 陀 | 陀 | 駄 | 駄 | 說 | 說 | 竊 | 竊 | 妙 | 妙 | 繙 | 繙 | 善 | 善 | | | | |
| 寄 | 寄 | 既 | 既 | 琦 | 琦 | 毀 | 毀 | 綺 | 綺 | 熙 | 熙 | 虧 | 虧 | 勑 | 勑 | 朕 | 朕 | 闡 | 闡 | 宸 | 宸 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 綜 | 綜 | 數 | 數 | | | | |
| 龜 | 龜 | 祇 | 祇 | 愧 | 愧 | 疑 | 疑 | 巍 | 巍 | 熙 | 熙 | 虧 | 虧 | 勑 | 勑 | 朕 | 朕 | 顛 | 顛 | 曾 | 曾 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 綜 | 綜 | 數 | 數 | | | | |
| 舉 | 舉 | 凝 | 凝 | 擬 | 擬 | 具 | 具 | 巍 | 巍 | 熙 | 熙 | 虧 | 虧 | 勑 | 勑 | 朕 | 朕 | 闡 | 闡 | 曾 | 曾 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 綜 | 綜 | 數 | 數 | | | | |
| 解 | 解 | 兮 | 兮 | 經 | 經 | 詣 | 詣 | 巍 | 巍 | 熙 | 熙 | 虧 | 虧 | 勑 | 勑 | 朕 | 朕 | 顛 | 顛 | 曾 | 曾 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 綜 | 綜 | 數 | 數 | | | | |
| 結 | 結 | 竭 | 竭 | 缺 | 缺 | 倦 | 倦 | 稽 | 稽 | 猶 | 猶 | 巖 | 巖 | 勑 | 勑 | 朕 | 朕 | 闡 | 闡 | 曾 | 曾 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 綜 | 綜 | 數 | 數 | | | | |
| 眷 | 眷 | 絢 | 絢 | 慊 | 慊 | 黔 | 黔 | 稽 | 稽 | 猶 | 猶 | 巖 | 巖 | 勑 | 勑 | 朕 | 朕 | 顛 | 顛 | 曾 | 曾 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 綜 | 綜 | 數 | 數 | | | | |
| 牙 | 牙 | 吳 | 吳 | 護 | 護 | 弘 | 弘 | 兼 | 兼 | 稽 | 稽 | 猶 | 猶 | 勑 | 勑 | 朕 | 朕 | 闡 | 闡 | 曾 | 曾 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 綜 | 綜 | 數 | 數 | | | | |
| 再 | 再 | 策 | 策 | 蹕 | 蹕 | 号 | 号 | 兼 | 兼 | 稽 | 稽 | 猶 | 猶 | 勑 | 勑 | 朕 | 朕 | 顛 | 顛 | 曾 | 曾 | 創 | 創 | 蒼 | 蒼 | 綜 | 綜 | 數 | 數 | | | | |
| 綱 | 綱 | 講 | 講 | 講 | 講 | 薩 | 薩 | 享 | 享 | 獻 | 獻 | 懸 | 懸 | 卒 | 卒 | 本 | 本 | 梵 | 梵 | 年 | 年 | 念 | 念 | 納 | 納 | 囊 | 囊 | 滂 | 滂 | 兜 | 兜 | | |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 號 | 號 | 毫 | 毫 | 羨 | 羨 | 膏 | 膏 | 免 | 免 | 冥 | 冥 | 蒙 | 蒙 | 年 | 年 | 念 | 念 | 納 | 納 | 囊 | 囊 | 滂 | 滂 | 兜 | 兜 | | |
| 縉 | 縉 | 辭 | 辭 | 刺 | 刺 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 黎 | 黎 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 孰 | 孰 | 熟 | 熟 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 毫 | 毫 | 羨 | 羨 | 膏 | 膏 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 再 | 再 | 策 | 策 | 蹕 | 蹕 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 綱 | 綱 | 講 | 講 | 講 | 講 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 孰 | 孰 | 熟 | 熟 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 縉 | 縉 | 辭 | 辭 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 再 | 再 | 策 | 策 | 蹕 | 蹕 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 綱 | 綱 | 講 | 講 | 講 | 講 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 孰 | 孰 | 熟 | 熟 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 縉 | 縉 | 辭 | 辭 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 再 | 再 | 策 | 策 | 蹕 | 蹕 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 綱 | 綱 | 講 | 講 | 講 | 講 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 孰 | 孰 | 熟 | 熟 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 縉 | 縉 | 辭 | 辭 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 再 | 再 | 策 | 策 | 蹕 | 蹕 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 綱 | 綱 | 講 | 講 | 講 | 講 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 孰 | 孰 | 熟 | 熟 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 縉 | 縉 | 辭 | 辭 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 再 | 再 | 策 | 策 | 蹕 | 蹕 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 綱 | 綱 | 講 | 講 | 講 | 講 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 孰 | 孰 | 熟 | 熟 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 縉 | 縉 | 辭 | 辭 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 言 | 旨 | 此 | 此 | 刺 | 刺 | 指 | 指 | 號 | 號 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 再 | 再 | 策 | 策 | 蹕 | 蹕 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫 | 靈 | 靈 | 履 | 履 | 融 | 融 | 彌 | 彌 | 約 | 約 | 報 | 報 | 編 | 編 | 變 | 變 |
| 綱 | 綱 | 講 | 講 | 講 | 講 | 冊 | 冊 | 薩 | 薩 | 參 | 參 | 骨 | 骨 | 今 | 今 | 紫 | 紫</td | | | | | | | | | | | | | | | | |

義天編纂『圓宗文類』卷第一（吉津・柴崎）

(表紙)

圓宗文類 第一
(墨筆)

三十九
(墨筆)
円宗文類 卷第一
高麗版 一冊

(表紙裏)

(覆表紙)

圓宗文類 卷二
(墨筆)
高麗版

(覆表紙裏)

圓宗文類卷第一

諸部發題類

進新譯華嚴經表 沙門弘景等 上

沙門弘景等言竊以理不自得藉教而悟教不自弘因人以闡然研精妙道豈聲聞之智力幽贊大乘蓋菩薩之能事雖十聖與三賢異位千馬將七寶殊途莫不大開方便之門廣務紹隆之業伏惟

天冊金輪聖神皇帝陛下積因成德乘權降靈受灌頂而垂衣膺轉輪而馭寓無偏無黨運慈悲而育黔庶雖休勿休當囑累而弘正法四生以之安樂三寶由其住持恭惟

大方廣佛華嚴經者斯乃滿藏之圓旨一乘之頓說理無大而不包義無微而不顯一言一句皆自在之法門無始無終悉甚深之境界見聞者猶其不易悟解者將知實難自非道出二乘位階五忍得文殊之護念成普賢之願力孰有能擊揚真實弘宣隱奧陛下以聖智潛通至靈昭感故能使等三千之經卷發自殊方包十萬之頌文來臻魏闕香函始届甘露夢而夕灑貝牒初開良雨應而朝洽

(一左)

人中三者

一在摩竭提國菩提場中

二在摩竭提國普光明殿

三在室羅筏國逝多林給孤獨園

(一右)

新譯大方廣佛華嚴經摠目
此經一部摠於七處九會說三十九品八十卷三藏
沙門于闐國僧實又難陀等奉 制譯

天冊金輪聖神皇帝親御法筵製序刊定七處者人
中三天上四

(二左)

陛下又親臨法座煥發序文自運仙毫首題名品七曜垂象景麗於三明八體成文光敷於五義法寶分行而錯落淨花入貫而昭彰九會真詮詞中悉顯百

天上四者

一在忉利天宮

二在夜摩天宮

三在兜率陀天宮
四在他化自在天宮

九會者人中三天上四三會普光明殿

第一會菩提場中說合六品一十一卷

世主妙嚴品第一五卷從第一至第五

如來現相品第二一卷第六

普賢三昧品第三

世界成就品第四已上二品共一卷第七

華藏世界品第五三卷從第八至第十

毗盧遮那品第六一卷第十一

第二會普光明殿說合六品四卷

佛名號品第七

四聖諦品第八已上兩品共一卷第十二

光明覺品第九

菩薩問明品第十已上兩品共一卷第十三

淨行品第十一

賢首品第十二已上兩品共一卷第十四

第三會忉利天宮說合六品三卷

昇須彌山頂品第十三

(三右)

須彌頂上偈讚品第十四

十住品第十五已上三品共一卷第十五

梵行品第十六

初發心功德品第十七已上兩品共一卷第十七

明法品第十八一卷第十八

第四會夜摩天宮說合四品三卷

昇夜摩天宮品第十九

夜摩宮中偈讚品第二十

十行品第二十一已上三品共兩卷第十九第二十

十無盡藏品第二十二一卷第二十一

第五會兜率天宮說合三品一十二卷

昇兜率天宮品第二十三一卷第二十二

兜率宮中偈讚品第二十四

十迴向品第二十五并前品合十一卷從第二十三至第三十三

第六會他化自在天宮說一品六卷

十地品第二十六六卷從第三十至第三十九

第七會重普光明殿說合十一品一十三卷

十定品第二十七四卷從第四十至第四十三

十通品第二十八

十忍品第二十九已上兩品共一卷第四十四

阿僧祇品第三十

壽量品第三十一

(四左)

(四右)

(五左)

菩薩住處品第三十二已上三品共一
卷第四十五

菩薩住處品第三十三兩卷第四十
六第四十七

佛不思議法品第三十六一卷第四十九

(五左)

御製新譯華嚴經序

有融作六十卷今之重譯成八十卷

如來十身相海品第三十四

隨好光明功德品第三十五已上兩品共一
卷第四十六

普賢行品第三十六一卷第四十七

普賢行品第三十六一卷第四十九

蓋聞造化權輿之首天道未分龜龍繫象之初人文始著雖萬八千歲同臨有截之區七十二君詎識無邊之義由是人迷四忍輪迴六趣之中家纏五蓋沒溺三塗之下及夫鷲巖西峙象駕東驅慧日法王超

第八會三會普光明殿說一品七卷

離世閒品第三十八七卷從第五十
三至第五十九

四大而高視中天調御越十地以居尊包括鐵圍延促沙劫其爲體也則不生不滅其爲相也則無去無

第九會給孤獨園說一品二十一卷

入法界品第三十九二十一卷從第六十
至第八十

來念處正勤三十七品爲其行慈悲喜捨四無量法運其心方便之力難思圓對之機多緒混大空而爲量豈算數之能窮入纖芥之微區匪名言之可述無

此經上本有三千大千世界微塵數偈四天下微(六右)
塵數品中本有四十九萬八千八百偈一千二百品下本
有十萬偈四十八品結集已後收入龍宮佛滅度六

百年後龍樹菩薩往龍宮將此下本出至天竺國造不思議論亦十萬偈以釋此經爰有東晉沙門支法領從于闐國但得此三萬六千偈并請得三果菩薩

禪師名佛駄跋陀羅此云覺賢姓釋迦氏即甘露飯王之苗裔來至晉朝以安帝義熙十四年於揚州謝

司空寺別造護淨花嚴堂於中譯出此經時堂前有一蓮花池每日有二青衣童子從池而出掃灑研墨暮還歸池經了便止後因改此寺爲興嚴寺至宋永初二年十二月與梵本勘畢當時五十卷成後人亦

(六左)

(七左)

者莫識其指歸挹之者罕測其涯際有學無學志絕窺覩二乘三乘寧希聽受最勝種智莊嚴之跡既隆普賢文殊願行之因斯滿一句之內包法界之無邊一毫之中置刹土而非隘塵竭陀國肇興妙會之緣普光法堂爰敷寂滅之理炳惟奧義譯在晉朝時踰

六代年將四百然一部之典纔獲三萬餘言唯啓半珠未窺全寶朕聞其梵本先在于闐國中遣使奉迎近方至此旣覩百千之妙頌乃披十萬之正文粵以

證聖元年歲次乙未月旅沽洗朔惟戊申以其十四

日辛酉於大徧空寺親受筆削敬譯斯經遂得甘露流津預夢庚申之夕膏雨灑潤後覃壬戌之辰式開

實相之門還符一味之澤以聖曆二年歲次己亥十

月壬午朔八日己丑繕寫畢功添性海之波瀾廓法

界之疆域大乘頓教普被於無窮方廣真筌遐該於

有識豈謂後五百歲忽奉金口之言娑婆境中俄啓

珠函之祕所冀闡揚沙界宣暢塵區竝兩曜而長懸

彌十方而永布一窺寶偈慶溢心靈三復幽宗喜盈

身意雖則無說無示理符不二之門然因言顯言方

闡大千之義輒申鄙作爰題序云

晉譯華嚴經探玄記序 沙門 法藏 述

夫以法性虛空廓無涯而超視聽智慧大海深無極而玩思議渺渺玄猷名言罕尋其際茫茫素範相見靡究其源但以機感萬差奮形言而充法界心境一味泯能所而歸寂寥體用無方圓融巨測於是無像現像猶賜谷之昇大陽無言示言若滄波之傾巨壑是故創於蓮華藏界演無盡之玄綱牢籠上達之流控引令階佛境然後化霑忍土漸布慈雲灑微澤以

（八右）

（八左）

潤三根滋道芽而歸一揆是知機緣感異聖應所以殊分聖應雖殊不思議一也華嚴經者斯乃集海會之盛談照山王之極說理致宏遠盡法界而亘眞源浩瀚微言等虛空而被塵國於是無虧大小潛巨刹以入毫端未易鴻纖融極微以周法界故以因陀羅網參互影而重重錠光頗黎照塵方而隱隱一即多而無尋多即一而圓通攝九世以入刹那舒一念而該永劫三生究竟堅固種而爲因十信道圓普德顯而成果果無異因之果派五位以分鑣因無異果之

因摠十身以齊致是故覺母就機於東城六千疏其

十眼童子詢友於南國百十圓以一生遂使不越樹

王六天斯屆詎移花藏十刹虛融示寶偈於塵中齊

輝八會啓王珠於性德七處圓彰浩浩鏗鎔隔思議而迴出巍巍煥爛超視聽於聾盲是故舍那創陶甄

於海印二七日旦爰興龍樹終俯察於虹宮六百年

後方顯然則大以包含爲義方以軌範爲功廣則體

極用周佛乃果圓覺滿花譬開敷萬行嚴喻飾茲本

體經則貫穿縫綴能詮之教著焉從法就人寄喻爲

目故云大方廣佛華嚴經世閒淨眼品者器等三種

顯耀於時光潔照明況於淨眼法喻合舉故云世閒

（十右）

淨眼語言理一格類相從故稱爲品此經有三十四品此品建初故稱第一故言大方廣佛華嚴經世閒

（九左）

淨眼品第一

續新華嚴略疏刊定記序 沙門 慧苑 述

觀夫大像無形赴感則形而無極大音無說應器則說而無窮蓋知形不自形赴感而形矣說無自說應器而說焉無形而形彌十方而不廣赴無極而不疲無說而說亘九世而不延應無窮而不倦大方廣佛華嚴經者實可謂不思議之祕藏難測量之教海文言浩瀚派衆典以爲原理趣淵玄會殊途而同致其爲體也則不生不滅非有非無用不滅爲無生以不生爲無滅事包萬類理極一如理無事而不融事無

(十左)

理而不徹故觸類成教即教亡言混眞俗於雙際跨空有於中道筌第絕寄教網踰張魚免無依義山彌峻其爲德也同異類之殊體則微細容持同異類之別軀則展轉重現微細之境難信曉之以芥瓶重現之相易疑喻之以帝網其爲用也則不分而遍不去而臻一多大小而互爲延促靜亂而相攝多劫入於一念非卷非舒微塵納於世界無增無減於是刹該淨穢娑婆震而華藏動主融報化瞻盧舍以見牟尼括三際之二七日乃闡揚之時分搃五位之一多身爲輔翼之圓滿即此即彼之體用不起而昇四天互隱互顯之主伴不謀而應十刹現能仁之海印七處昭彰開所化之蓮華九會彪炳若乃具金剛種雖八

(十一左)

新譯華嚴經疏序

沙門 法銑 述

夫說稱祕密經號難思是以近隔於二乘遠召於菩薩由是始成正覺即授大機藉普賢之威神承舍那之願力盛宣所證廣被有緣遂使塵數菩薩即座而蒙記福城童子一生而行圓況復理洞真源萬像咸歸於法性事超情量九世皆成於刹那相即全奪而俱存互現交參而不雜娑婆不異於花藏化相無殊於報身斯皆教盡幽微道絕常境故使近機不悟久

(十二右)

隱虬宮末代有緣始傳龍樹洎乎宋代方流此土蓋由法興託處機感待時先握半珠後探全寶甘液入君王之夢表惠澤之流津動地歸法會之前庶迷徒之覺悟大哉方等曠劫未聞可謂策象駕於平衡乘寶車於坦路群生何幸得扣玄關遠踵於善財高邁

於身于豈一時之慶幸蓋累劫之津梁者歟所言大

方廣佛花嚴經者舉一部之都名世主妙嚴品者三

十九章之別自然則大以歎德顯異餘乘方廣舉名

爲殊他分豈三乘之所擬非九部之可齊軌用包含

故標斯稱佛則就人辨果證悟功圓花嚴則約喻舉

因開敷行滿經則能貫能攝契理契機若泉涌而無

窮如結鬘而不散古今恒定常義存焉從法就人寄

喻爲目故云大方廣佛華嚴經世主妙嚴品者佛爲

世主寔群生之所尊土日妙嚴賴如來之神力凡欲

宣唱先淨道場土淨由佛故標斯稱第者居也品者

類也此經有三十九品此品冠初故云第一

新譯華嚴經清涼疏序 汝州刺史陸長源述

大方廣佛華嚴經者西方謂之圓滿修多羅也大者

如字之覆方者如地之載廣者籠萬有而爲義佛者

摠十号而稱首花者行業之繁繪嚴者莊敬之成飾

其功大其德圓峯巒齒齒而不極波瀾浩森而無際

法教之宗系經論之泉藪江河之歸東海星象之拱

北宸微妙甚深不可得而稱也其梵本本在于闐國

晉朝所譯纔三萬餘言證聖初詔迎梵本就譯於大

遍空寺凡十餘萬言如來之牆仞莫窺法界之津涯

益廣先有古德康藏法師造疏二十卷雖闕鑰少開

而源流未盡今有澄觀法師者本越州山陰人也九

（十三右）

歲依當州寶林寺需禪師誦經至年十四遇恩得度（十四右）
隸居寶林寺宇量昭融神用儻遠慧日朗其心境甘
露灑其情田偏尋名山悉求祕藏梯航旣具靈奧必
臻懸悟天台止觀又明法花楞伽涅槃維摩等經起
信俱舍中百等論辯聰表其詞鋒慧解發於談柄由
是價高林遠聲邁生融遂通此經兼閱舊疏初守岐
以訪路終窮流而得源因住清涼山大華嚴寺般若
院探蹟衆經搜訪諸論天台四教禪門兩宗蹟微秩
其闕文扣寂徵其遺韻莫不鏡含獨見冰散積疑昭
昭焉懸白日於九霄浩浩焉豁長波於萬里法師貌

清冰玉行踰雪霜自造此疏不出院門者一十七年
禪室止於方丈僧服存乎一衲當代榮華去如遺矣

滿堂珠玉視之蔑然貞元七年河東節度李自良以
師敬之禮奉迎出山始居於北都大崇福寺鳴法鼓

以集有緣開法筵而度群品智聾性定者發慧於鍾
梵之間年耆德邁者攝齋於杖履之下遠矣大矣其

乎在茲其疏凡二十卷已行於代長源慕德旣深聞
風而悅未造忘筌之地空慙側管之窺輕敘大猷得

非狂簡云爾

新譯華嚴經疏序 沙門澄觀述

（十五右）

往復無際動靜一源含衆妙而有餘超言思而迥出
者其唯法界歟剖裂玄微昭廓心境窮理盡性徹果

該因汪洋沖融廣大悉備者其唯大方廣佛華嚴經焉故我世尊十身初滿正覺始成乘願行以彌縫混虛空爲體性富有萬德蕩無纖塵湛智海之澄波虛含萬象皎性空之滿月頓落百川不起樹王羅七處於法界無違後際暢九會於初成盡宏廓之幽宗被難思之海會圓音落落該十刹而頓周主伴重重極十方而齊唱雖空空絕跡而義天之星象燦然湛湛亡言而教海之波瀾浩瀚若乃千門潛注與衆典爲洪源萬德交歸攝群經爲眷屬其爲旨也冥眞體於萬化之域顯德相於重玄之門用繁興以恒如智周鑒而常靜眞妄交徹即凡心而見佛心事理雙修依本智而求佛智理隨事變則一多緣起之無邊事得理融則千差涉入而無導故得十身歷然而相作六位不亂以更收廣大即入於無閒塵毛包納而無外炳然齊現猶彼芥解具足同時方之海滴一多無導等虛室之千燈隱顯俱成似秋空之片月重重交映若帝網之垂珠念念圓融類夕夢之經世法門重疊若雲起長空萬行芬披比華開錦上若夫高不可仰則積行菩薩曝鰐鱗於龍門深不可窺則上德聲聞杜視聽於嘉會見聞為種八難超十地之階解行在躬一生圓曠劫之果師子奮迅衆海頓證於林中衆王迴旋六千道成於言下啓明東廟智滿不異於初

(十五左)

心寄位南求因圓不踰於毛孔剖微塵之經卷則念果成盡衆生之願門則塵塵行滿真可謂常恒之妙說通方之洪規稱性之極談一乘之要軌也尋斯玄旨却覽餘經其猶呆曰麗天奪衆景之耀須彌橫海落群峯之高是以菩薩搜祕於龍宮大賢闡揚於東夏顧惟正法之代尚匿清輝幸哉像季之時偶斯玄化況逢聖主得在靈山竭思幽宗豈無慶躍題稱大方廣佛華嚴經者即無盡修多羅之揔名世主妙嚴品第一者即衆篇義類之別目大以曠兼無際方以正法自持廣則稱體而周佛謂覺斯玄妙華喻功德萬行嚴謂飾法成人經乃注無竭之涌泉貫玄凝之妙義攝無邊之海會作終古之常規佛及諸王並稱世主法門依正俱曰妙嚴分義類以彰品名冠群篇而稱第一斯經有三十九品此品建初故云大方廣佛華嚴經世主妙嚴品第一

(十五右)

隨疏演義鈔序 沙門 澄觀述
至聖垂詰鏡一心之玄極大士弘闡燭微言之幽致雖亡懷於詮旨之域而浩瀚於文義之海蓋欲寄象繫之跡窮無盡之趣矣斯經文理不可得而稱也晉

譯祕典賢首頗得其門唐翻靈篇後哲未窺其奧不揆膚受輒闡玄微偶溢九州遐飛四海講者盈百咸叩余曰大教趣深疏文致遠親承指訓髮鬚近宗垂

範千古慮惑高悟希垂再剖得觀光輝順斯雅懷再此條理名爲隨疏演義昔人云人在則易人亡則難今爲此釋冀遐方終古皆若面會然繁則倦於章句簡則昧其源流顧此才難有慙折中意夫後學其辭不枝矣

貞元新譯華嚴經疏序 沙門 澄觀奉 詔述

大哉眞界萬法資始包空有而絕相入言象而無跡妙有得之而不有眞空得之而不空生滅得之而眞常緣起得之而交映我佛得之妙踐眞覺廓淨塵習寂寥於萬化之域動用於一虛之中融身刹以相含流聲光以遐燭我皇得之靈鑒虛極保合大和聖文掩於百王淳風吹於萬國敷玄化以覺夢垂天眞以性情是知不有大虛曷展無涯之照不有眞界豈淨等空之心大方廣佛華嚴經者即窮斯旨趣盡其源流故恢廓宏遠包納沖邃不可得而思議矣指其源也情塵有經智海無外妄惑非取重玄不空四句之火莫焚萬法之門皆入冥二際而不一動千變而非多事理交徹而雙亡以性融相而無盡若秦鏡之互照猶帝珠之相含重重交光歷歷齊現故得圓至功於頃剋見佛境於塵毛諸佛心內衆生新新作佛衆生心中諸佛念念證眞一字法門海墨書而不盡一毫之善空界盡而無窮語其定也冥一如於無心即

（十八右）

萬動而恒寂海湛眞智光含性空星羅法身影落心水圓音非扣而長演果海離念而心傳萬行忘照而齊修漸頓無導而雙入雖四心被廣八難頓超而一極唱高二乘絕聽當其器也百城詢友一道棲神明正為南方盡南矣益我爲友人皆友焉遇三毒而三

德圓入一塵而一心淨千化不變其慮萬境順通于

道契文殊之妙智宛是初心入普賢之玄門曾無別體失其旨也徒修因於曠劫得其門也等諸佛於一朝杳矣妙矣廣矣大矣實乃罄諸佛之靈府拔玄根

之幽致昇慧日以廓妄扇慈風以長春包性相之洪

流掩群經之光彩豈唯明逾朝徹靜越坐亡而已耶

然玄籍百千幽關半掩我皇御宇德合乾坤光宅萬方重譯來貢東風入律西天輸越海之誠南印御書

北闕獻朝宗之敬特迴明詔再譯眞經光闡大猷增輝新理澄觀顧多天幸欽矚盛明奉詔譯場承旨幽

贊抃躍兢惕三復竭愚露滴天池喜合百川之味塵

培華嶽無增萬仞之高大方廣所證法也佛華嚴能

證人也極虛空之可度體無邊涯大也竭滄溟之可

飲法門無盡方也碎塵刹而可數用無能測廣也離

覺所覺朗萬法之幽邃佛也芬敷萬行榮耀衆德華

也圓茲行德飾彼十身嚴也貫攝玄妙以成眞光之

彩經也揔斯七字爲一部之宏綱則無盡法門思過

（十九左）

（十九右）

（十八左）

（二十右）

半矣

圓覺經略疏序 中書侍郎平章事裴休撰

夫血氣之屬必有知凡有知者必同體所謂真淨明妙虛徹靈通卓然而獨存者也是衆生之本源故曰心地是諸佛之所得故曰菩提交徹融攝故曰法界寂靜常樂故曰涅槃不濁不漏故曰清淨不妄不變故曰眞如離過絕非故曰佛性護善遮惡故曰摶持隱覆含攝故曰如來藏超越玄闕故曰密嚴國統衆德而大備爍群昏而獨照故曰圓覺其實皆一心也背之則凡順之則聖迷之則生死始悟之則輪迴息親而求之則止觀定慧推而廣之則六度萬行引而爲智然後爲正智依而爲因然後爲正因其實皆一法也終曰圓覺而未嘗圓覺者凡夫也欲證圓覺而未極圓覺者菩薩也具足圓覺而住持圓覺者如來也離圓覺無六道捨圓覺無三乘非圓覺無如來泯圓覺無眞法其實皆一道也三世諸佛之所證蓋證此也如來爲一大事出現蓋爲此也三藏十二部一(二十一右)

(二十左)

衆僧齋于州民任灌家居下位以次受經遇圓覺了義卷未終軸感悟流涕歸以所悟告其師師撫之曰汝當大弘圓頓之教此經諸佛授汝耳禪師旣佩南宗密印受圓覺懸記於是閱大藏經律通唯識起信(二十一左)等論然後頓轡於華嚴法界宴坐於圓覺妙場究一雨之所霑窮五教之殊致乃爲之疏解凡大疏三卷大鈔十三卷略疏兩卷小鈔六卷道場修證儀一十八卷並行於世其敘教也圓其見法也徹其釋義也端如析薪其入觀也明若秉燭其辭也極於理而已不虛騁其文也扶於教而已不苟飾不以其所長病人故無排斥之說不以其未至蓋人故無智慮之論蕩蕩然實十二部經之眼目三十五祖之骨髓生靈之大本三世之達道後世雖有作者不能過矣其四(二十二右)

依之一乎或淨土之親聞乎何盡其義味如此也惑曰道無形視者莫能覩道無方行者莫能至況文字乎在性之而已豈區區數萬言而可詮之哉對曰噫

是不足以語道也前不云乎統衆德而大備爍群昏而獨照者圓覺也蓋圓覺能出一切法一切法未嘗切脩多羅蓋詮此也然如來垂教指法有顯密立義有廣略乘時有先後當機有深淺非上根圓覺其孰能大通之故如來於光明藏與十二大士密說而顯演潛通而廣被以印定其法爲一切經之宗也圭峯禪師得法於荷澤嫡孫南印上足道圓和尚一日隨

疏也羅五千軸之文而以數卷之疏通之豈不至簡哉何言其繁也及其斷言語之道息思想之心忘能所滅影像然後爲得也固不在詮表耳嗚呼生靈之所以往來者六道也鬼神沈幽愁之苦鳥獸懷猶狹之悲修羅方瞋諸天正樂可以整心慮趣菩提唯人道爲能耳人而不爲吾末如之何也已矣休常遊禪師之闔域受禪師之顯訣無以自效輒直讚其法而普告大衆耳其他備乎本序云

圓覺經略疏序 圭峯沙門 宗密 述(二十三右)

元亨利貞乾之德也始於一氣常樂我淨佛之德也本乎一心專一氣而致柔修一心而成道心也者沖虛妙粹炳煥靈明無去無來冥通三際非中非外洞徹十方不滅不生豈四山之可害離性離相奚五色之能盲處生死流驪珠獨耀於滄海踞涅槃岸桂輪孤朗於碧天大矣哉萬法資始也萬法虛僞緣會而生生法本無一切唯識識如患夢但是一心心寂而知目之圓覺彌滿清淨中不容他故德用無邊皆同一性性起爲相境智歷然相得性融身心廓爾方之(二十三左)

海印越彼大虛恢恢焉晃晃焉迥出思議之表也我佛證此憫物迷之再歎奇哉三思大事旣全十力能摧樹下魔軍爰起四心欲示宅中寶藏然迷頭捨父悟有易難故仙苑覺場教興頓漸漸設五時之異空

有迭彰頓無二諦之珠幽靈絕待今此經者頓之類歟故如來入寂光土凡聖一源現受用身主伴同會曼殊大士創問本起之因薄伽至尊首提究竟之果照斯真體滅彼夢形知無我人誰受輪轉種種幻化生於覺心幻盡覺圓心通法徧心本是佛由念起而(二十四右)

漂沈岸實不移因舟行而驚驟頓除妄宰空不生華漸竭愛源金無重鑛理絕修證智似階差覺前前非名後後位況妄忘起滅德等圓明者焉然出殿良駒已搖鞭影蘊塵大寶須設治方故三觀澄明真假俱

入諸輪綺互單複圓修四相潛神非覺違拒四病出體心華發明復令長中下期克念攝念而加行別徧互習業障惑障而銷亡成就慧身靜極覺徧百千世界佛境現前是以聞五種名超刹寶施福說半偈義勝河沙小乘實由無法不持無機不被者也噫巴歌(二十四左)

和衆似量騰於猿心雪曲應稀了義匿於龍藏宗密

髫專魯誥冠討竺墳俱溺筌累唯味糟粕幸於涪上針芥相投禪遇南宗教逢斯典一言之下心地開通

一軸之中義天朗耀頃以道非常道諸行無常今知心是佛心定當作佛然佛稱種智修假多聞故復行詣百城坐探群籍講雖濫泰學且師安叨沐猶吾之納謬當真子之印再逢親友彌感佛恩久慨孤負將陳法施採集般若綸貫華嚴提挈毗尼發明唯識然

醫方萬品宜選對治海寶千般先求如意觀夫文富(二十五右)

義博誠讓雜華指體投機無偕圓覺故參詳諸論反

復百家以利其器方爲疏解冥心聖旨極思研精義備性相禪兼頓漸勒成三卷以傳強學然上中下品根欲性殊今將法彼曲成從其易簡更搜精要直注本經庶即事即心曰益曰損者矣

般若心經略疏序 沙門 法藏 述

夫以真源素範沖漠隔於筌第妙覺玄猷奧蹟超於言象雖眞俗雙泯二諦恒存空有兩亡一味常顯良

以真空未嘗不有即有以辨於空幻有未始不空即(二十五左)

空以明於有有空有故不空不空之空空而非斷不有之有而不常四執既亡百非斯

遺般若玄旨斯之謂歟若歷事備陳言過二十萬頃若撮其樞要理盡一十四行是知詮眞之教乍廣略而隨緣超言之宗性圓通而俱現般若心經者實謂曜昏衢之高炬濟苦海之迅航拯物導迷莫斯爲最然則般若以神鑒爲體波羅蜜多以到彼岸爲功心顯要妙所歸經乃貫穿言教從法就喻詮旨爲目故言般若波羅蜜多心經

金剛般若經纂要序 圭峯沙門 宗密 述

鏡心本淨像色元空夢識無初物境成有由是惑業襲習報應輪塵沙劫波莫之遏絕故我滿淨覺者

現相人中先說生滅因緣令悟苦集滅道旣除我執未達法空欲盡病根方談般若心境齊泯即是眞心即第九分句偈隱略旨趣深微慧徹三空檀含萬行住一十八處密示階差斷二十七疑潛通血脉不先遣遣曷契如如故雖策脩始終無相由斯教理皆密(二十六左)

行果俱玄致使口諷牛毛心通麟角或配入名相著事乖宗或但云一眞望源迷派其餘曾談臆注不足論矣河沙珍寶三時身命喻所不及豈徒然哉且天親無著師補處尊後學何疑或添或棄故今所述不攻異端疏是論文乳非城內纂要名意及經題目次下即釋無煩預云

仁王般若經疏序 沙門 良賁奉 詔述

粵真理湛寂迥出有無之表智鏡澄照洞鑒性相之源德海揚波汨清流於塵刹牟尼大聖故現跡於王(二十七右)

宮從無生而生則生無所生演無說之說則說無所說動而寂若清月凌空語而默等摩尼照物所以如來在昔居乎鷲峯住定興悲光馳聚曰波斯匿等霧集煙凝亂墜天花坦夷巖谷遂得淨土穢土密布慈雲聖衆凡衆皆霑法雨宗陳護國乃理事雙彰包括始終則境智俱寂啓五忍而行位在日談二諦而迷悟唯心帝釋却頂生之軍普明開班足之悟花彰令

(二十六右)

德力現難思十三法師文昭昭乎指掌七難氣息光

冥冥乎寰區恐季葉凋殘故永言深誠若非大明作（二十七左）

照何以破昏衢大震法音何以窒諸慾者矣皇唐八

葉再造生靈玄化無垠正刑有截張墜網震頽網駢

黔庶於福壽之場導蒼生於無爲之宅廣運明德光

揚聖旨乃詔不空三藏令重譯斯經三藏言善兩方

教傳三密龍宮演奧邃旨聞天佛日再中真風永扇

良貴學孤先哲有點清流叨接翻傳謬膺筆受幸揚

天闕親奉德音令於大明宮南桃園修疏贊演宸光

曲照不容避席竊玄珠於貝葉但益慙惶捧白璧於

丹墀寧勝報效仰酬皇澤俯課忠勤旣竭愚誠庶昭（二十八右）

玄造矣釋經題目義兼通別仁王標請主之嘉名護

國彰祈法之所爲般若波羅蜜多明境智之幽玄序

品第一即八章之別目亦可仁者五常之首王者德

貫三才護者悲力濟時國者所居閻域般若淨慧破

識浪之煩籠波羅彼岸即清涼之室宅蜜多者離義

到義經者連綴攝持序者起之端由品者區分彙聚

第者次第一者初首人法雙彰故云仁王護國般若

波羅蜜多經序品第一此之一跪義添兩宗又多別行故今附之

首楞嚴經疏序 御史中丞王隨撰（二十八左）

大佛頂密因了義首楞嚴經者乃竺乾之洪範法苑之寶典也昔能仁以出震五天獨尊三界假金輪而

啓物現玉毫而應世觀四生之受苦也惠濟庶物愍群機之未悟也力垂善誘于是俯仰至理述宣微言闢大慈之門廓眞如之海以爲一切諸法唯依妄念而起一切衆生不出因緣而有乃知生死輪轉貪欲爲本修證常樂禪慧爲宗則斯經也可以辯識諸魔破滅七趣謂止及觀修圓教妙明之心發眞歸源證上乘至極之說懿其般刺譯其義房相筆其文今江（二十九右）

吳釋璿師學識兼高辯才無導以是經典爲時教於一代分妙理於十門功濟大千道傳不二瞪目合手

以明妄毀相泯心以會宗信受則爲世津梁開悟則入佛知見乃顯經以作疏因疏以明理故可以開前疑而決後滯披迷雲而覩慧日然後知色空無異同

歸實際生佛靡殊不離方寸隨志在外護慙無內學因獲覽閱輒述序引歸依法寶幸精究於眞詮讚揚佛乘願普霑於勝果者已大宋天聖八年青龍庚午孟冬二十一日辛丑道齋東軒敘

（二十九左）

梵網經疏序 沙門 法藏 述

原夫法身虛應浹有岸以甄形妙智潛通極無邊而照象至眞明理即事而能理旋超視聽之外冥權會事即理而能事迴架筌罋之表故得蓮華藏界懸日月以照臨菩提樹王開甘露而濟乏千花千百億盧舍那爲本身十重四十八釋迦文爲未化不可說法

啓心地於毛端不思議光舉身花於色頂於是四十

二位大士之所同修八萬威儀聖賢以之齊致況乃

恒沙戒品圓三聚而統收塵數嚴科具六位而該攝

既如因陀羅網同而不同似薩婆若海異而不異等

摩尼之雨寶濟洽黎元譬瓔珞以嚴身功成妙覺是

故五位菩薩莫不賴此因圓三世如來無不由斯果

滿既爲道場之路亦是正覺之良規大矣哉難得

而言者也然則梵約當體離染爲名網就喻彰功能

立號經則貫穿縫綴體用同詮盧舍那則遍照果圓

說則扣機宣唱菩薩標因異果顯能持之人十重等

簡法異人顯所持之法重開二五輕分六八嚴憲防

止故稱爲戒文無二軸故云一卷故言梵網經盧舍

那佛說菩薩十重四十八輕戒一卷

起信論疏序

沙門 法藏 述

(三十左)

起信論疏序 沙門 元曉 述
之流因茲悟入者矣

起信論疏序

沙門 元曉 述

原夫大乘之爲體也蕭焉空寂湛爾沖玄玄之又玄
豈出萬象之表寂之又寂猶在百家之談非象表也
五眼不能觀其容在言裏也四辯莫能談其狀欲言

大矣入無內而莫遺欲言微矣包無外而有餘引之
於有一如用之而空推之於無萬物乘之而生不知

何以言之強号之謂大乘自非杜口大士目擊丈夫
誰能論大乘於離言起深信於絕慮者哉所以馬鳴(三十二右)

菩薩無緣大悲傷彼無明妄風動心海而易漂愍此
本覺真性睡長夢而難寤於是同體智力堪造此論
贊述如來深經奧義欲使爲學者暫開一軸遍探三
藏之旨爲道者永息萬境遂還一心之源所述雖廣
而即眞凡聖致一其猶波無異溼之動故即水以辨

於波水無異動之溼故即波以明於水是以動靜交(三十一右)
徹眞俗雙融生死涅槃夷齊同貫但以如來在世根

熟易調一稟尊言無不懸契大師沒後異執紛綸或
趣邪途或奔小徑遂使宅中寶藏匪濟乏於孤窮衣
內明珠弗解貧於傭作加以大乘深旨沈貝葉而不
尋群有盲徒馳異路而莫反爰有大士厥號馬鳴慨
此類綱悼斯淪溺將欲啓深經之妙旨再曜昏衢斥
邪見之顛眸令歸正趣使還源可即反本非遙造廣
論於當時遐益群品旣文多義邈非淺識所闡悲末
葉之迷倫又造斯論可謂義豐文約解行俱兼中下(三十一左)

性淨於相染普綜踰闊十五之幽致至如鶴林一味之宗鷲山無二之趣金鼓同性三身之極果花嚴瓔珞四階之深因大品大集曠蕩之至道日藏月藏微密之玄門凡此等輩衆典肝心一以貫之者其唯此（三十二左）論乎故下文言爲欲揔攝如來廣大深法無邊義故

應說此論此論之意趣旣其如是開即無量無邊之義爲宗合即二門一心之法爲要二門之內容萬義而不亂無邊之義同一心而混融是以開合自在立破無導開而不繁合而不狹立而無得破而無失是爲馬鳴之妙術起信之宗體也然以此論意趣深邃從來釋者尠得其宗良由各守所習而牽文不能虛懷而尋旨所以不近論主之意或望源而迷派或抱葉而亡幹或割領而補袖或折枝而蒂根今直依此（三十三右）論文屬當所述經本庶同趣者消息之耳

御製釋摩訶衍論通玄鈔引文

大遼天祐
皇帝製

朕聞如來啓運具四智以流徽聖教談微應三乘而導物自結集之後逮傳布以還不有聖賢疇能啓迪故馬鳴大士即其人也夙證十身之果示居八地之因將斥邪宗紹隆正法著一百部論釋百億契經或華文以立名或攝義以爲目維起信論可得而稱焉辭簡而邃理該而通派五分之指歸闡二門之蘊奧

寔一代之靈編也次有菩薩号曰龍樹思報師恩廣（三十三左）

宣論意造釋論十卷行於世其義顯燦兮若三辰之麗天咸覩其光彩其言博浩乎如四溟之紀地莫測其涯涘暨乎蘭陀筏提之輩譯之於前法藏元曉之釋典故於茲論尤切探蹟今東山崇仙寺沙門志福業傳鷲嶺德茂鵬耆迺謂斯文獨善諸教囊括妙趣樞要實乘期在宣揚且資贊述繇是尋原討本博採菁義勒成釋摩訶衍論鈔四卷爰削章而陳達欲鏤板以傳通虔瀝懇悰願爲標引勉愈所請聊筆其由（三十四右）仍以通玄二字爲題云爾

法界無差別論疏序 沙門 法藏 述

詳夫性海虛凝迥架名言之表寂門圓應潛該相用之源故使常湛妙因作濤浪之淵府緣生幻果依涅槃而起滅出入冥會動靜相和理不乖事不轉性而成物事不乖理不壞物而歸性是則性非自性多門所以立焉物非他物一相所以存焉乃知含孕太虛而不增其量隱祕纖芥而不減其形者寔唯法界無

差別之緣起乎將以智求則乖其實欲以情測則失（三十四左）

其眞如來示滅茲道陵替後之學者或守權乖實矣有堅慧菩薩傑出中天位登證實聲高五印思欲光揚万行匡贊一乘罄已所知略示群品其爲論也理超謂跡以菩提心涅槃界爲因果之勝地清淨土功

德山爲緣性之平轍善苗擢葉即返流而契本白法
開花自還源而造極亘煩惱海不思議而一味滿衆

生界豈斷常而萬殊若虛空在雲無以蔽其寥廓如

摩尼處垢不足染其清明文略義玄喻近意遠開夷

路也平等朗然而不變則勇進者乘真而直入辨實(三十五右)

相也緣起紛然而不作則羸退者知迷而率服豈煩
衆異妄見之躊躇而重嬈其心哉作者之致庶幾於
顏子矣然大乘則簡大異小甄別所宗法界無差別
則簡實異權標其玄奧論則解釋精微一卷則言無
二軸餘義下當別辨

十二門論疏序

沙門 法藏 述

夫以玄綱絕待眞俗所以俱融素範超情空有以茲
雙泯但以性空未嘗不有即有以辨於空幻有未始
不空即空以明於有有空有故不有空有空故不空(三十五左)

靜亂俱融消能所以入玄宗泯性相而歸法界竊見(三十六左)

玄綱浩瀚妙旨希微覽之者詎究其源尋之者罕窮

其際是以真空滯於心首恒爲緣慮之場實際居於
目前翻爲名相之境今者統收玄奧囊括大宗出經
卷於塵中轉法輪於毛處明者德隆於即曰昧者望
絕於多生會旨者山嶽易移乖宗者鎗銖難入輒以
旋披往詰納覲舊章備三藏之玄文憑五乘之妙旨

繁辭必削缺義復全雖則創集無疑況乃先規有據
窮茲性海會彼行林別舉六門通爲一觀參而不雜
一際皎然冀返迷方情同曉日佩道君子俯而詳焉(三十七右)

注華嚴法界觀門序 縣州刺史裴休述
法界者一切衆生身心之本體也從本已來靈明廓
徹廣大虛寂唯一眞之境而已無有形貌而森羅大

二之宏綱坦幽途而顯實今即相還源融神妙寂開(三十六右)
情煥理故号爲門往復析徵復稱爲論門有十二因
以爲名餘義下當別釋

華嚴妄盡還源觀序 沙門 法藏 述

感茲魚目爰有大士厥稱龍猛位登極喜應兆金言
慨此頽綱悼斯淪溺將欲燃正法炬覆邪見幢故使
製作繁多溢於天竺然則要妙之述此論爲先標十
八部爭揮燭火遂使眞空慧日匿輝昏雲般若玄珠

千無有邊際而含容萬有昭昭於心目之間而相不可覩晃晃於色塵之內而理不可分非徹法之慧目離念之明智不能見自心如此之靈通也甚矣衆生之迷也身反在於心中若大海之一漚爾而不自知有廣大之威神而不能用燄燄而自投於籠檻而不自悲也故世尊初成正覺歎曰奇哉我今普見一切(三十七左)衆生具有如來智慧德相但以妄想執著而不證得於是稱法界性說華嚴經令一切衆生自於身中得見如來廣大智慧而證法界也故此經極諸佛神妙智用徹諸法性相理事盡修行心數門戶真可謂窮理盡性者也然此經雖行於世而罕能通之有杜順和尚歎曰大哉法界之經也自非登地何能披其文見其法哉吾設其門以示之於是著法界觀而門有三重一曰真空門揀情妄以顯理二曰理事無導門融理事以顯用三曰周徧含容門攝事事以顯玄使(三十八右)

其融萬象之虛相全一眞之明性然後可以入華嚴之法界矣然此觀雖行於世而罕能入之有圭山禪師歎曰妙哉法界之門也自非知樞鑰之淺深識闇闥之廣陋又何能扣其門而入之哉於是直以精義注於觀文之下使人尋注而見門得門而入觀由觀以通經因經以證性朗然如秉炬火而照重闕矣或問曰法界眞性超情離見動念則隔彊言則乖世尊

欲令衆生悟自身之法體何必廣說而爲華嚴答曰吾聞諸圭山云法界萬象之眞體萬行之本源萬德(三十八左)之果海故如來演萬行之因華以嚴本性而顯示諸佛證法性之萬德也故九會之經品品有無量義或刹塵數因地行願或恒沙數果位德用行布差別無尗圓融故佛身一毛端則徧一切而含一切也世界爾衆生爾塵塵爾念念爾法法爾無一法定有自體而獨立者證此本法故能凡聖融攝自在無尗納須彌於芥中擲大千於方外皆吾心之常分爾非假於他術也由是觀之則吾輩從來執身心我人及諸法

定相豈非甚迷甚倒哉然則華嚴稱法界而極談猶(三十九右)

未爲廣也問曰華嚴理深而事廣文博而義玄非法

身大士不能證入今數紙觀文豈能盡顯之哉若觀門以文略義廣爲得則大經以文繁義局爲失矣答

曰吾聞諸圭山云夫欲觀宗廟之邃美望京邑之巨麗必披圖經而登高臺然後可盡得也不登高而披圖則不可謂真見不披圖而登高則眊然無所辨故法界具三大該萬有性相德用備在心不在經也明因果列行位顯法演義勸樂生信備在經不在觀也

觀者通經法也文者入觀之門也注者門之樞鑰也(三十九左)故欲證法界之性德莫若經通經之法義莫若觀入觀之重玄必由門闢三重之祕門必由樞鑰夫如是

則經不得不廣門不得不束矣然則其門何以爲三
重荅曰吾聞諸圭山云凡夫見色爲實色見空爲斷
空內爲筋骸所梏外爲山河所眩故困跼於迷塗局
促於轍下而不能自脫也於是菩薩開真空門以示
之使其見色非實色舉體是真空見空非斷空舉體
是幻色則能廓情塵而空色無導泯智解而心境俱
冥矣菩薩曰於理則見矣於事猶未也於是開理事
無導門以示之使觀不可分之理皆圓攝於一塵本
分限之事亦通徧於法界然後理事圓融無所罣繆
矣菩薩曰以理望事則可矣以事望事猶未也於是
開周徧含容門以示之使觀全事之理隨事而一一
可見全理之事隨理而一一可融然後一多無導大
小相含則能施爲隱顯神用不測矣問曰觀文有數
家之疏尚未能顯其法今略注於文下使學者何以
開心目哉荅曰吾聞諸圭山云觀者見法之智眼門
者通智眼令見法之門初心者悟性之智雖明不得
其門則不能見法此文即入法之門矣但應以智眼
於門中觀照妙境若別張義目而廣釋之是於門中
復設門也又此門中重重法界事理無邊雖百紙不
能盡其義徒以繁文廣說蕪沒真法而惑後人爾且
首標修字者欲使學人冥此境於自心心慧既明白
見無盡之義不在備通教典碎列科段也然不指而

(四十右)

示之則學者亦無由及其門故直於本文闡要之下
隨本義注之至其門已則使其自入之也故其注簡
而備不備則不能引學者至其門不簡則不能使學(四十一右)
者專妙觀夫觀者以心目求之之謂也豈可以文義
而至哉問曰略指其門誠當矣吾恐學者終不能自
入也荅曰吾聞諸圭山云夫求道者必資於慧目慧
目不能自開必求師以抉其膜也若情膜未抉雖有
其門亦焉能入之哉縱廣何益問曰旣遇明師何假
略注荅曰法界難覩須依觀以修之觀文難通須略
注爲樞鑰之用也惑者稽首讀曰入法界之術盡於
此矣

華嚴經隨品讚引文

侍中監修國史魏國公臣姚 景禧奉勅撰(四十一左)

臣恭聞大華嚴經之甚深法門我毗盧佛之圓滿教
藏齊說則現十身而相作合名則通三聖以共成六
相昭然十玄具矣盡趣歸於實際咸包攝於他宗脩
短寧差分全不導多劫無窮而融於一念法界至大
而含於一塵奧旨難思微言莫測如來入涅槃之後
百千經沈祕於龍宮菩薩尋海藏之中十萬偈誦傳
於像運初興印度次被支那昔流教以疏源今讚經
而有主 我聖文神武睿孝皇帝宿弘大願深種善
根遍窮貝葉之文僻悟蓮花之藏求無上道發最勝(四十二右)

心思顯圓宗略陳大要行分偈布都就經而提綱言約義豐第隨品而作讚斯乃登覺山之捷徑啓定室之幽關理無不周事無不悉剖一乘之妙典盡得指歸收九會之玄文皆當條貫宸章絢彩慧日增輝表聖皇之奇才爲希代之絕唱詞峯峽巒盤智地以逾高性海汪洋導心源而不竭盡未來際常轉於法輪通無邊方普懸於佛鏡塵塵刹刹聞見增緣一一重重自他獲利寔三寶歸依之所迺群生究竟之因臣謬冠台司恭承睿旨述御藻之前引慙儒學之後來(四十二左)納滴水於滄溟莫資巨量飄孤螢於白晝何益大明伏願三十九章方廣永流於別派萬八千歲清寧長亨於鴻圖

諸宗止觀引文

兵部侍郎參知政事臣劉 詵奉 劅撰

恭聞十號能仁始王三千之界一音妙法次周百億之區應其根隨利鈍之差示其化分權實之異故諸乘並驚趣向靡同衆教互興指歸非一若迺燭昏衢於永夕航苦海於驚瀾闢入聖之玄樞廓出塵之正路則惟止及觀茲可得而稱矣論其體也常寂常照(四十三右)

開闢 我聖文神武全功大略聰仁睿孝天佑皇帝之在宥也乘五精而撫運御六辯以熙時政踰八世之隆德跨九皇之上勳成橐矢道洽垂衣加以聽覽之餘存誠貝典製讚暢圓宗之旨文碑紀梵刹之芳日諷金言時譚寶偈豈祇達色空之妙境抑能疏靜慮之淳源每延召名師窮研奧義顧謂沙門道弼曰(四十三左)朕嘗因多暇溥念群生或作或修有同有異苟迷津之見滯則聖域以曷躋且諸宗止觀之文迺往聖淵將傳布以副朕懷維師識際義天學窮智地理契一如之奧道居三輩之先祇奉炳言潛符夙志繇是鉤深索隱以曰擊時博採群經歷探衆說捨小以存大託本而起未區以別之遂成編次初依四教開爲五宗總啓十門離爲三卷發揮妙蘊若旭景之麗高穹(四十四右)詒釋群疑類曾冰之泮巨壑閱之者表理由事證行之者知惑自智亡亦旣奏陳上用嘉止賜其題曰大乘諸宗修行止觀要訣申命有司摹匠以摹印仍詔近臣著文以紀錄臣才非華國職贊秉鈞承中旨以靡遑愧內學而且懵強抽鄙思勉述清芬所願四衆齊修萬靈密佑永息貪瞋之毒長薰定慧之香拔邪見之徒歸于正見遺有爲之相至于無爲茂集殊因鉅利旣年禩之云邈在興墜以匪常不遘睿明孰能

上資睿等云爾

(四十四左)

興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

圓宗文類卷第一

繙秀 詳校

祕書省楷書臣 鄭先書

興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

道隣 詳校

興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

景宜 詳校

興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

佛日寺寶王院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

覺之 詳校

興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

惟儼 詳校

興教寺住持傳賢首教觀圓覺景哲演奧慈應利生

弘濟首座賜紫臣

理璫 重校
(四十五右)

慧宣 詳校

興王寺弘教院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

真觀寺道樹院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

妙智寺德海院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

承謂 詳校

佛日寺龍臺院講賢首教觀義學沙門賜紫臣

精瑩 詳校

奉先寺住持傳賢首教觀義學沙門賜紫臣

稟賢 詳校(四十六右)

松川寺住持傳賢首教觀義學沙門賜紫臣

樂真 詳校

靈悟 詳校

歸信寺住持傳賢首教觀義學沙門賜紫臣

應闡 詳校

花嚴寺住持傳賢首教觀義學沙門賜紫臣

俊韶 詳校

海印寺住持傳賢首教觀義學沙門賜紫臣

處元 詳校

興教寺住持傳賢首教觀圓覺景哲演奧慈應利生

弘濟首座賜紫臣 理琦 重校

佛日寺住持傳賢首教觀性圓景哲演奧慈應利生

弘濟首座賜紫臣 處淵 重校

興王寺住持傳賢首教觀兼講天台教觀南山律鈔

因明等論等觀普應圓明福國慈濟廣智開宗弘真

祐世僧統臣 義天 編定

(四十六左)

〔後記〕

『圓宗文類』卷第一の閲覧及び翻刻を許可して頂いた龍谷大學図書館及び大変な御高配を頂いた神子上恵生先生に對して感謝申し上げます。

吉津宜英記